



学校教育・学習の行き先 どんな学習方法が自分に 合っているのか？

1. どんな学習方法が自分に合っているのか？

学習方法にはいろいろなものがありますが、繰り返しの学習をして学習意欲や効果を高めていく子どももいれば、繰り返さない思考学習で効果を上げていく子どももいます。

今回は、学習方法の例をあげながら、指導する側が整理しやすいように解説、分析していきます。

☆さまざまな学習方法

【反復学習】

何度も紙に書いたり、頭の中で反芻したりして覚える一番スタンダードな方法です。

【赤シートで隠す学習】

まとめノートを作る際、答えを赤シートで隠せるペンで書いて、あとで見直す方法です。

【壁に貼る学習】

机の前や廊下、階段、トイレ、ベッドから見えるところなど、あちこちに覚えるべきことを貼っていく方法です。覚えることがらと、貼ってあった場所を結びつけることで、記憶に残りやすくなります。

【音楽・リズム型学習】

替え歌を自分で作ってしまう方法です。作るのに時間はかかってしまいがちですが、覚えてしまうと強烈に印象に残る方法です。

【全身学習】

身体を動かしながらする学習方法です。立ちながら、または歩きながら勉強してみたり、身体の動きに合わせて暗唱してみたりと、工夫ができます。机の前にじっと座っているのが苦手な子どもにはおすすめです。

【ノルマ型学習】

「今日、〇ページまで必ず終わらせてからごはんを食べる」というように、自分自身にノルマを課す方法です。自分を追い込むことができる子どもには効果的です。

【ご褒美型学習】

ノルマ型とは逆で、「〇〇ができたからお菓子を食べていい」などの、ご褒美を事前に設定しておくことでやる気を出す方法です。ご褒美のタイミングは、一日単位であったり、また、テストごとであったりとさまざまです。

【競争型学習】

友だちや家族と競いながら学習する方法です。競争相手がいることで向上心を身につけることができます。友だちと遊んでしまわないかが心配かもしれませんが、負けず嫌いな子どもの場合、上手くいくこともあります。

【人に教える学習】

自分のことばで他人に説明することで、より理解を深められます。説明しようとして上手くことばにならなかったときは、理解できていなかったことを発見できたこととなります。教える相手がいないときは、自分自身に説明するだけでも効果があります。

☆「自分に合った」学習方法は、自分で見つける

Aさんには【反復学習】が一番合っていたとします。しかし、Bさんにも【反復学習】が合うかどうかはわかりません。

自分に合った学習方法を見つけるために、人に聞いてみたり、よくできる人のやり方を観察したりして、さまざまな学習方法を知ることが大切です。前述の他にも学習方法はたくさんあります。また、今の時代、インターネットで検索すればたくさん紹介されています。

「どんな学習方法が自分に合っているのか？」と考えるのは、とても良いことです。今までのやり方を変えてみたい、もっと学習効果を高めたい、という気持ちの現れです。

「自分に合った」学習方法を見つけるには、自分で試してみるしかありません。そして、答えは1つとは限りませんし、絶対はありません。

最終的には、子ども自身がいかに工夫して乗り越えていくかが大切になります。また、効果があるかどうかについて検証するには、中途半端に終わらせずに、やり始めたら必ず最後までやりきって、結果的に効果があったかを客観的に考察する必要があります。

指導する側として大切なことは、さまざまな学習方法を子どもに伝えることはもちろんですが、自分に合った学習方法を身につけさせ、最後までやりきるように指導することです。

(文/学林舎編集部)

学校教育・学習の行き先 読解、要約、表現力の必要性

新学習指導要領が掲げている大きな目標は、学習の中で、子どもたちに「生きる力」、つまり学校のテストや入学試験のためだけの学力を超えた、社会や生活で役に立つ力を身につけてほしいというものです。その生きる力を育むために、今回の改訂では、例えば英語であれば「話す力」、理科であれば「データを分析する力」などがより重要視され、そういった力を育む授業を行うことが求められています。その中で、今回は、全教科において必要となる3つの力、「読解力」「要約力」「表現力」について詳しく分析、解説を行います。

3つの力はそれぞれどのようなものでしょうか。「読解力」は、簡単に言うと、文章を読んで内容を正確に理解する力です。文章を正しく理解するためには、豊富な語彙力の他に、小説では比喻表現や登場人物の言

動などから状況や感情を読み取る力、説明文では段落のつながりなどから筆者の主張を理解する力なども必要です。また、文章以外にも、表やグラフなどを読み取り、内容を正しく理解する力も読解力であると言えるでしょう。次に、文章などの論旨や要点を短くまとめる力が、「要約力」です。要約と聞くと、ストーリーの1から10をすべて述べる人がいますが、要約とは重要なポイントを見極め、できるだけ簡潔にまとめることです。最後に、「表現力」は、読んだ文章の内容などを自分のことばで相手に伝えたり、話し合いなどで意見を述べたりするときに必要となる力です。相手にどのように伝えたらわかりやすいかを考え、自分が持っている語彙力や表現力を駆使して伝えなければなりません。相手に反論したり、相手を説得したりするために必要な力でもあります。

新学習指導要領の中で、上記で述べた読解力、要約力、表現力はなぜ重視されているのでしょうか。もちろん、どの力も社会で生きていく中で必要なものですが、特に、現代のインターネット社会においては、コミュニケーションを行うためにより重要視されるからだと思います。

現代では、コンピュータやインターネットが発達し、誰もがあらゆる情報を手軽に、自由に手に入れられるようになりました。スマートフォンやタブレットを持っていれば、いつでも、どこにいても情報を手に入れられる、とても便利な時代です。かつては、内容が吟味された教科書や書籍などを読み、知識を身につけることが主流でしたが、現在は調べ物はインターネットで済ませる人も多いでしょう。しかし、誰もが情報を手に入れられると同時に発信することもできます。そのため、インターネット上に存在する大量の情報の中には、真偽が不確かなものもたくさん存在します。ですから、情報を鵜呑みにするのではなく、本当に正しい情報なのか、自分に必要な情報なのかをよく吟味し、取捨選択を行う必要があります。そうして手に入れた情報を、人に伝えたり、情報について自分の意見を述べたりすることは、現代社会におけるコミュニケーションでは不可欠です。このときこそ、学校で身につけた読解力、要約力、表現力が生かされるのです。

(文/学林舎編集部)

学習教育の行き先 進む少子化に学習教育は どう対応するのか

日本の人口は2008年をピークに減少し、2019年には出生数が90万人を下回りました。今後いっそう少子化が進むと考えられる日本では、教育のあり方も日々変化しています。一方、日本でも多くの外国人が働くようになり、訪日外国人数や日本の在留外国人数は年々増加しています。日本だけでなく、さまざまな国の人々が世界中を行き来し、活躍しています。このようにグローバル化が進展する中で、日本では国際社会で活躍できるグローバル人材の育成が進められています。そこで、少子化が進む日本において、どのような教育が求められるのかについて考えます。

文部科学省は、グローバル人材は、以下の3つの要素を満たすことが必要であると定義しています。

- ① 語学力・コミュニケーション能力
- ② 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- ③ 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

2020年から、小学校3・4年生でも英語学習が必修化されました。小学校教育で、子どもたちは英語を「話す」「書く」「聞く」「読む」といった基礎学習に取り組み、英語に親しみます。このような英語の基礎学習は、小・中・高を通じて行われ、①の要素の充実を図ります。少子化とともに少人数学級が増えていますが、これは一人ひとりに対する細やかな指導が可能になり、学力の向上に有用です。

次に、②の要素を身につけるには、少人数のグループ学習で、子どもたちが課題について自ら考え、意見を出し合い、発表する、このような活動が効果的だと考えられます。中学校や高等学校の中には、グループによる課題研究を行っている学校もあります。

③の要素を満たすためには、世界のさまざまな文化にふれることが必要です。日常生活の中で子どもたちがふれるのは、学校や家庭、友人関係など、日本の限

られた範囲だけです。家庭で外国に関する書籍や映像を見たり、美術館・博物館などを通して異文化にふれたりするなど、積極的に世界の文化に親しむことが大切です。また、文部科学省は、高校生の留学や海外の学校との交流を推奨し、特に活動がさかんな高等学校をスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定しています。学校現場においても、ICT(情報通信技術)を活用して外国の学校との交流を図ったり、国内の遠隔地にある学校どうしで意見交換を行ったりしています。

将来的にはさらに少子化が進み、労働人口は減少すると想定されており、今後、日本は外国人労働者の受け入れを、ますます拡大していくと考えられています。また、世界の国々で活躍する人も、いっそう増えていくことでしょう。世界各国のさまざまな人が混ざり合う社会においては、3つの要素を満たすグローバル人材の育成が必須です。グループ学習やICTを活用しながら、能力や理解を高めていくことが求められています。

(文/学林舎編集部)

クロスロード Crossroad

第104回 文／吉田 良治

新学期

4月に入り新学期が始まりました。今年は新型コロナウイルス・新型肺炎の感染拡大が続いており、多くの教育機関で休校が続いており、授業を提供する場合でも学校に登校せず、オンライン授業の対応を取るところも出てきました。

日本ではまだまだオンライン授業の環境整備が不十分です。これは教育を提供する側はもちろん、教育を受ける側も同様です。特に受け手側のネット環境によって、データの受け渡しがうまくいきません。ライブのオンライン授業になると、通信が止まってしまうことも起こります。高校までの一般授業ならライブ授業でなくても、動画データでの提供なども有効かもしれません。いかに有効な手段で質を下げない教育を提供できるか、知恵を絞るところといえます。

最近日本の教育でも取り上げ始めている双方向で行うアクティブラーニングは、ネット会議式に行った授業であっても、使えるリソースには限界があります。また、実験などが必要な理系の教育になると、実験設備は学校や大学に行かねば使用できません。特に高度な実験に関わる大学の授業になると、当然自宅でオンラインで受ける授業では対応不可能です。

オンライン授業でのメリットも見えてきました。登下校の時間が無くなり、自宅待機で自由に使用できる時間が増えています。授業も定時に行うのではなく、自分の好きな時間に受けるということであれば、受講する際集中して取り組むことができます。自分のペースで早く授業を終えることができると、別のことに時間を使うことができます。レポートも通常授業中に作成するとなると、限られた時間内に仕上げないといけな

いため、レポートの精度はそう高くなりませんが、レポート制作時間の制約がなくなると、レポートの質が高まってきます。

オンライン授業の運用で注意が必要なことは、受け手側の生活習慣ではないかと感じています。学校の教室での授業は、高校までであれば毎朝定時に登校し、部活などがなければ定時に帰宅できます。つまり朝同じ時間に起きて一日をスタートさせる、規則正しい生活習慣を持つことができるのです。自宅でのオンライン授業では、朝から定時にライブ授業を受ける場合でなければ、生活習慣がルーズになる可能性も出てきます。学校教育の役割は質の高い教育を提供するだけでなく、日々の生活習慣を整えることも重要です。自宅で受講するオンライン授業であっても、いつも通り決まった時間に起きて、規則正しく生活することを続けることが重要です。

今回の新型コロナウイルス・新型肺炎の問題は、有効なワクチンが開発されるまでこの生活が続いていきます。おそらく通常の社会生活に戻るまで長期間要するかもしれません。いつその日が戻ってきても、すぐに適応するために、日々規則正しく生きていくこと、そこがあって初めて教育も生きてきます。適度な運動も含めて毎日心身とも健全な生活を送ることに努め、正常な社会生活が戻ってくるときに備えることは、ウイルス感染予防と同様大きなカギとなります。

(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
<http://ameblo.jp/outside-the-box/>